

[特別企画3]

新たな献血推進の取り組み
～固定施設からのアプローチ～

大山実花, 江口沙央理, 加治佐早也佳, 川崎由希絵, 横山一行, 檜物茂樹, 上床勇揮, 中村和郎, 竹原哲彦
鹿児島県赤十字血液センター

(背 景)

鹿児島県内には、「献血ルーム・天文館」と「献血プラザかもいけクロス」の2つの固定施設がある。今回は「献血ルーム・天文館」(以下「当ルーム」と略す)での取り組みを中心に紹介する。

当ルームは、平成25年度から平成27年度にかけて、年々採血実績が減少し、平成28年度に「改善検討施設」に指定された。これを機に、これまで以上に所内全体でカイゼンに取り組むこととなり現在に至っている。カイゼンにあたっては、①「労働環境および運用のカイゼン」、②「献血推進活動のカイゼン」、③「効率的な献血実施にかかるカイゼン」、④「献血者満足度向上に向けたカイゼン」の4つの視点で総合的に進めているが、以下では②「献血推進活動のカイゼン」について述べる。献血推進体制のあり方については、厚生労働省医薬食品局血液対策課(2009, P.4)が「献血への協力企業は着実に増加しているが、献血者に配慮した採血時間帯にするなどの欧米の事例も参考に、より多くの企業の協力を得るための努力や工夫が必要である」と述べているように、重視されている課題である。

(目 的)

本カイゼンを開始するにあたり、はじめに当ルームが位置する「天文館」地域の特色を考察した。「天文館」地域は、市内のいたる場所にさまざまな商業施設が建設された影響で、全盛期と比較するとかなり人通りが減少しているが、南九州最大の繁華街である。市外からの交通アクセスが良い点や、事業所の本部機能が集中している点も特色である。特色の中から、とくに事業所の本部機能が

集中している点に注目し、事業所への献血周知・協力依頼が、事業所からの献血協力に繋がることで、献血者増加が見込めるのではないかと考えた。①協力事業所数、②事業所からの協力者数、③平均一稼働献血者数、④平均一稼働業務量、以上4点の増加を目的として平成28年度から事業所への献血推進改善活動を開始した。

(方 法)

具体的な推進方法の検討にあたり、事業所側と当ルーム側の双方のメリットを考察した。

事業所側のメリットとしては、①当ルームの開所日が定休日(毎週金曜日)を除く平日・土・日・祝日であるため、事業所の繁忙期・閑散期を考慮した上で協力期間を設定可能なこと②献血協力により社会貢献活動に参加していることを社会にPR可能なこと③健康診断に付加した従業員の健康管理ツールとして活用可能なこと④当ルーム内でのパンフレット設置により事業所のPRが可能なこと等がある。

当ルーム側のメリットとしては、①献血の興味・関心に繋がる献血の普及啓発が可能なこと②定期的かつ安定的な献血者確保が可能なこと③センター全体での献血推進が実施可能なこと等がある。

このうち「③センター全体での献血推進」とは、例を挙げると、過去に献血バスで協力していたが何らかの事情で休止中となっている事業所等を対象とし、献血推進3課(推進課, 献血課および当ルーム)で情報共有を行い、事業所にとって協力しやすい協力方法での献血推進を図ることである。また、当初は、推進課が主として実施していた事業所への献血推進を、献血課および当ルーム

も積極的に展開することにより、献血推進3課での協議・検討・調整が活発化することもメリットとなり得ると考えた。

具体的な方法(図1)としては、まず当ルーム職員が事業所へ訪問し、献血の実情について説明を実施する。協力打診と検討依頼の公文書①を提出する。その後、当該事業所より「協力可能」と回答があった場合、協力方法・協力期間の設定について調整し、具体的な内容を記載した公文書②を提出する。協力事業所内での周知・広報は、チラシやポスター、紹介カード等に事業所名や協力依頼期間を掲載して作成し依頼した。事情により献血協力が困難な方は、紹介カードを知人へ渡し、「献血者紹介」を依頼し、紹介カードで紹介された方も当該事業所の実績として取扱う。協力期間中は、協力状況に関する経過報告や再度声掛けの依頼、とくに強化が必要な採血種別や血液型についてもその都度案内を行う等周知に努める。協力期間終了後は、お礼と共に報告書の提出や次回実施の相談を行う。

(結 果)

取り組みの結果、平成27年度から平成29年度において①協力事業所数は0事業所から23事業所へ②事業所からの協力者数は0名から215名へ

③平均1稼働の献血者数(表1上)は37.4名から44.4名へ④平均1稼働業務量(表1下)は54.8ポイントから68.7ポイントへ増加した。平均1稼働献血者数は、献血者が減少傾向にあった下半期にかけて協力依頼に力を入れたため、平成28年度と平成29年度は顕著に増加した。平成30年度も前年度と同等、若しくはそれ以上の結果を得ることができている。

(考 察)

センター全体での連携した献血推進活動や、事業所の形態に応じた柔軟な依頼が実施できたことが献血者数増加へ繋がったと考える。

新たな取り組みとして、当ルームでの実績を踏まえ、「献血プラザかもしけクロス」でも平成30年度から献血推進活動を開始し、平成30年度現在、当ルームと同様に献血者数が前年度を上回る等、一定の成果を上げている。

今後は平均1稼働の献血者数や業務量ポイントの増加、若年層献血者の確保、分割血小板を含む成分献血者の安定確保、予約者や献血セミナーの増強、献血者の送迎の導入、1稼働あたりの献血者数50人以上を目標とし、さらなる献血推進活動に取り組むことが課題である。

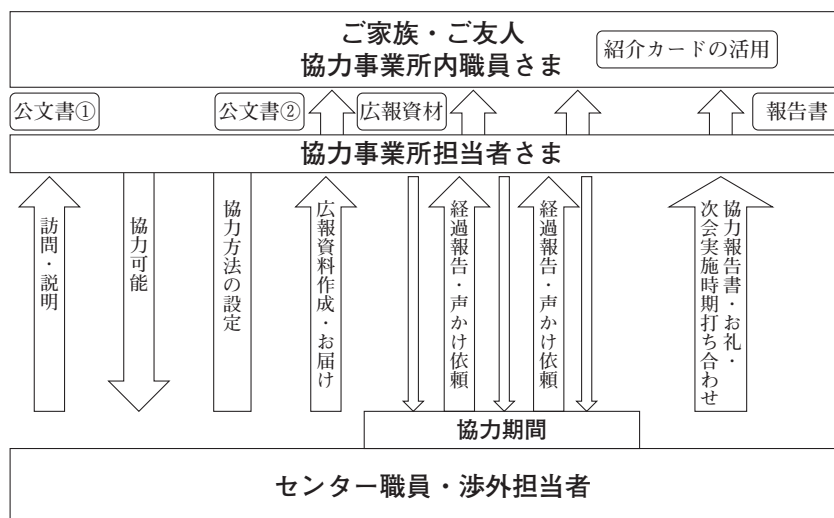


図1 方法

表1 献血ルーム天文館における平均1稼働献血者数の推移(上)と平均1稼働業務量の推移(下)

(2018年10月1日現在)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	平均
平成26年度	40.5	43.1	39.8	39.8	44.0	39.7	34.9	36.8	37.7	36.4	38.6	33.7	38.8
平成27年度	34.2	40.6	34.1	36.4	38.7	42.3	37.3	34.9	35.9	38.4	39.7	35.7	37.4
平成28年度	34.8	38.3	37.7	39.5	42.6	44.6	43.1	38.5	43.3	48.0	44.0	44.9	41.6
平成29年度	43.7	42.1	41.1	41.4	44.8	46.9	43.1	44.0	44.9	47.0	48.4	45.0	44.4
平成30年度	42.5	43.4	46.5	44.0	46.5	45.7							44.8

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	平均
平成26年度	61.6	63.6	60.2	61.1	63.6	59.9	53.5	56.8	57.2	56.1	59.1	51.4	58.7
平成27年度	51.0	58.3	50.9	54.3	57.1	62.3	54.1	52.3	52.5	56.0	57.5	51.6	54.8
平成28年度	46.3	54.0	55.8	60.5	64.1	66.2	64.2	58.6	63.9	73.6	66.1	67.3	61.7
平成29年度	66.2	63.6	62.8	65.8	69.7	75.3	68.0	68.4	68.4	73.4	74.1	69.0	68.7
平成30年度	66.8	68.2	71.7	69.7	73.0	73.1							70.4

文 献

- 1) 厚生労働省医薬食品局血液対策課「献血推進のあり方に関する検討会報告書」2009年